

盗賊戦争(1915年7月)

1913年、メキシコ湾からアリゾナ、カリフォルニアにかけての国境防衛のため米国陸軍は南部軍管区の本拠地をサンアントニオに置いた。1915年、師団長ジェネラル・フレデリック・フンストンは二万人に満たない兵力で千七百四十五マイルの国境線の警護にあっていた。もともとジェネラル・フンストンの主要任務は、メキシコ人グループがアメリカ領土を足場に特定の革命分派を支援することを禁じた、所謂中立法違反行為を取り締まるためであり、盗賊や密輸の取締りではなかった。二月末、テキサス州知事ジェームス・E・ファーガソンは、テキサスは日毎メキシコからの侵入者により掠奪を受けていることを訴えて、ウイルソン大統領に助けを求めた。ファーガソンは国境における恐怖に対処すべく、三十人のテキサス・レンジャースを雇うため、三万ドルが必要であった。フンストンは、ファーガソンが状況を途轍もなく誇張していると報告した。ウイルソンは英断を下し、資金援助をしない代わりに、三月五日より掠奪集団を敵と見做して南部軍管区部隊に対応させるよう政策転換をした。フンストンはファーガソンと協議し、最も不安定な地域に部隊を配備し、敵を逮捕、武装解除して保安官に渡す手筈を整えた。³⁴

1915年におけるファーガソン知事のレンジャース部隊は定員を割っていた。四年前にテキサス議会が承認したテキサス・レンジャース部隊は総員八十五名、大尉、一等軍曹と二十名ずつの四個中隊を総務局長が統括することになっていたが、1915年6月時点、総数三十四名の三個大隊にすぎなかった。レンジャース総務局長は日増しに不穏になる南テキサスの情勢に対応し、J. J. サンダース大尉のA中隊、J. M. フォックス大尉のB中隊をヴァレーに配置した。後にD中隊が追加され、ラレドからブラウンズヴィルのリオグランデからコーパスクリスティにかけての七十五%のレンジャースがいた。³⁵

テキサス・レンジャースの記録によると、テキサスでは「盗賊戦争」と呼ばれたサンディエゴ計画(PSD)攻撃隊による襲撃の始まりは1915年7月2日の夜とされている。不法侵入した武装騎馬集団がリオグランデの北約三十マイルのセバスチャンで目撃された。レンジャー・ロイ・アルドゥリッチ、税関検査官ジョセフ・テイラーは直ちに土地の農場主と保安隊を組織して追跡したが、盗賊を発見できなかった。7月6日、保安隊は三十五名になっていた。翌日には陸軍騎兵部隊も加わり、総勢五十人を越える保安隊は探索を続けた。それから数日間、幾つかの襲撃事件が発生した。メキシコから侵入した盗賊は河から二十マイル近く侵入して馬や馬具を盗み、住民を恐怖に陥れた。³⁶

侵入者は保安隊を撤いて、疲れた馬を乗り捨て、新しい馬を盗んで乗り換え、牧場の牛や山羊を屠殺して食用にした。この辺りは略奪者には恰好の地勢であった。広い範囲にわたって農業用地に切り開かれていても、カメロン、ヒダルゴ両郡一帯は低い檜の木の間、メスキート、低木の藪、ウチワサボテンなどがいたるところに群生していた。曲がりくねったリオグランデは兩岸を背の高い草や低木の林で覆われていて、この年は旱魃のため水

量は少なく、渡河できる場所は無数にあった。

最初の一週間P S D攻撃隊は保安隊の裏をかいた。保安隊員は盗賊団の行動パターンが理解できなかった。気になったのは、攻撃隊が郡の北方と河岸周辺とで同時作戦を展開していたことであった。ポート・イサベルからブラウンズヴィルをパトロールしていた騎兵隊が河岸近くで銃撃を受けた。

盗賊戦争で最初の死者が出たのは7月9日、カメロンとヒダルゴ郡境であった。大農場キング・ランチの現場監督フランク・マーティンが一人の盗賊を殺し、もう一人は重傷を負った。それから三日後の日曜日、ブラウンズヴィル近くで行われた屋外ダンスパーティーで保安官代理とコンステーブル（治安官）代理が射殺された。両方ともメキシコ系であった。襲ったのは二人組みで、一人は川向うのマタモロスへ逃げ、あとの一人は重傷を負い、暫くして死んだ。³⁷

7月12日、襲撃は大胆になった。十一人のメキシコ人武装集団がライフオードから四マイル南にあるニルス・ピーターソンの店を襲い、店主に銃口を突きつけたままライフルやショットガンの弾、食料品などを強奪し、電話線を切断して逃走した。保安官は直ちに保安隊を組んで追跡したが無駄であった。集団の中にいた年配の男は誘拐されて道案内人にされていたが、その夜うまく逃れた。このことから盗賊の一团はこの辺の者ではないことが分かった。治安当局を不安にさせたのは、これまでの一連の襲撃事件は単なる盗賊集団ではなく、ゲリラ戦を思わせるような動きをしていたことであった。³⁸

7月17日、P S D奇襲隊はカメロン郡の北部で最初のアングロ、十八歳のブライアン・ボレイを犠牲にした。レイモンズヴィルの東十八マイルの農場で、ボレイが二人のメキシコ人と働いているところへ武装した騎馬のメキシコ人一人が現れた。三人は急いで家へ駆け込み武器を取って元の場所へ戻ったところをボレイは二発撃込まれ死んだ。カメロン、ヒダルゴ、ウィラシー三郡のシェリフは保安隊を組み、後を追ったが、犯人は見付からなかった。³⁹

ボレイ殺害はヴァレーー帯にパニックを引き起こした。税関の協力を受けた保安官もレンジャースも取締りの成果を上げていなかった。農園主は家族を町へ移し始めていた。ヴァレーー最大のキング農場を持つ富豪シーザー・クレバークは知事に治安回復を要求した。もう一つ知事を動かした要因があった。灌漑事業の進展と共に土地ブームが起っていた。奇襲隊は影響力のある政治家や裕福な地主に深刻な影響を与えた。早急にこの一帯の治安を回復しない限り、土地を売ることが出来ず、融資した銀行が破綻する恐れが出てきた。知事ファーガソンは連邦政府に泣きついた。ワシントンは再びテキサスを狼少年としか見なかった。法律上軍隊が出動できるのは、アメリカで徴集した革命部隊がメキシコに入るのを阻止する場合と、メキシコから攻め込む武装集団と戦う場合に限られているとして、ジェネラル・フンストンは部隊の増強に応じなかった。⁴⁰

国境近くの住民は保護を求め絶叫し、部隊の増強はなく、連邦政府から資金援助を拒まれたファーガソンは、か細い財政をなんとか工面して渋々レンジャースの増員に踏み切った。彼は四個目のD部隊を創設してヴァレーの問題に対処することにした。ファーガソンはD部隊の隊長にヘンリー・リー・ランソムを任命した。ランソムはテキサス・レンジャースの歴史上最も物議を醸す大尉となった。スペイン戦争中ランソムは1899年十九歳でテキサス騎兵中隊の一員としてフィリピンに派遣され、二年間従軍した後、ほぼ一貫して保安関係の仕事をし、1905と09年の二度にわたり、共に短い間レンジャースに所属したことがあった。

ランソムは1910年、治安の悪化していたヒューストンで刑事として雇われて間もなく、真夜中近く同僚と二人で路面電車を待っていた著名な弁護士に近づいて、至近距離から射殺し、殺人罪で告訴されが、弁護士が拳銃を持っていたので、巧みに正当防衛を主張して無罪となった。1912年、彼はヒューストン市長ライスから警察署長に任命された。彼の荒っぽい取締りのため市民から警察暴力へ批判が高まり、次の市長が就任するなり解任された。7月20日、知事によって任命されたランソムは、7月24日ハーリンジェンに駐屯した。⁴¹

7月24日、奇襲隊がブラウズヴィルから五十マイル上流にある小さな村落プログレッソにあるサエンスの店を襲った。カメロン郡保安官補佐チャディックが襲撃者の一人を射殺し、税関検査官ホワイトがもう一人を逮捕に抵抗した理由で殺した。同じ日ブラウズヴィル近くの屋外ダンスパーティーでカメロン郡のメキシコ系治安官と補佐官の二人が刺された。⁴²

7月25日、奇襲隊は更に大胆なゲリラ攻撃を加えた。数人がセバスチャンの近くで、鉄道の橋に火を放って破壊した。鉄道に沿った電信・電話線は切断され、線路を止める犬釘も抜かれ、ブラウズヴィルは事実上孤立した。二人のレンジャース大尉、サンダースとランソムの部隊が昼夜にかけて探索したが、何の手掛かりも得られなかった。⁴³

7月29日の夜、サンベニート市治安官フランク・カーと保安官代理ダニエル・イノホサは、アングロ殺害と牛を盗んだ容疑で留置所に入れられていたアドルフォ・ムニョスをブラウズヴィルへ移す目的で車に乗せて出発した。翌朝ムニョスが大きなメスキートの木に吊るされているのが見付かった。カーとイノホサはウインチェスター銃を振り回す覆面をした八人の男に待ち伏せされムニョスを奪われたと報告した。二人は屈強な保安官としてこの一帯では畏れられていて、途中で易々と囚人を奪われる事は考えられず、恐らく彼等の作り話であろうと思われる。

翌週、攻撃は激しさを増した。8月2日、ポイント・イサベルから十四マイルほどのところで測量をしていた一団が十五人のメキシコ人から銃撃を受けたが、一人が銃弾で掠り傷を受けた以外は全員無事であった。同じ頃ブラウズヴィル郊外でメキシコから河を渡って侵入した二組の奇襲隊員が農場主に銃を突きつけて十三頭の馬と鞍を五つ奪って逃げ

た。 44

34. James A. Sandos, "Rebellion in the Borderlands, Anarchism and the Plan of San Diego 1904-1923", University of Oklahoma Press, P86

35. Ibid. P86

36. Charlehs H. Barris III and Louis R. Sadler, "Texas Rangers and the Mexican Revolution", University of New Mexico Press, 2002, P248

37. Ibid. P250

38. Ibid. P250

39. Ibid. P251

40. Ibid. P252

41. Ibid. P 255—257

42. Ibid. P260

43. Ibid. P258

44. Ibid. P260